繊研新聞 2025年7月23日付7面 地域流通 北海道

帯広・藤丸再生へにぎわい

30年の再建に向け「藤丸パーク」開業

北海道帯広市の中心市街地に7月6日、「藤丸パーク」がオープンした。23年1月に閉店した百貨店、藤丸を建て替えて再生するプロジェクトが進行しており、30年に予定する開業までの間をつなぎ、気運をさらに高める役割を担う。帯広の中心市街地は他の地方都市と同様に郊外に集積が進んだことで商業立地としての地盤が沈下、藤丸の閉店で最後の大型店がなくなった形で、現況は全国と共通する。一方で地域の経済や人口動態の課題は小さく、活性化の条件は比較的整っているとされている。すでにディスプレーのスペースがプロジェクトをサポートしており、藤丸パークのオープンを機にCCC（カルチュア・コンビニエンス・クラブ）グループも参画することになった。藤丸パークでの取り組みを踏まえながら、困難とされてきた地方での百貨店再生に挑む。

経済と人口の条件生かす

協賛金集めて開設

藤丸パークは藤丸の建物に近接した遊休地を活用したもので、3300平方㍍の敷地に、トレーラー型の店舗とテラス、ドッグランなどを組み合わせる。食物販と生活用品の二つで構成される「藤丸ショップ」と公募した飲食の3店が入る。ローカルで人気のカレー店「インデアン」の運営会社による新業態などが入っており、地域の魅力を発信する。12～3月の冬季は休業するが、イベント広場ではマルシェなどを開催、にぎわいを創出することにしており、一角には市内を回る観光馬車の乗降場所も設けられている。

この整備には「藤丸サポーター」を組織して集めた協賛金の3億円のうち2億円余りがあてられている。藤丸を運営していた旧藤丸は私的整理され、屋号を引き継ぐ新たな藤丸が設立されており、再生のプロジェクトを進めている。藤丸サポーターはその中で取り組まれたもので、24年11月～今年3月に3億円を集めていた。個人、企業など836のサポーターを組織したもので、街のランドマークを再建する取り組みが幅広く支持されている。

地域ににぎわいと過ごす場を提供する「藤丸パーク」

中心地の負を転換

このあと秋までに解体工事がスタート、建て替えに着手することになっている。解体費用は補助金などでメドがついたとし、地方百貨店の再建への挑戦が本格化する。

藤丸の村松一樹社長兼CEO（最高経営責任者）は「帯広で成功しなければ、ほかでも成功できないだろう」と道筋に自信をのぞかせる。帯広を中核とする十勝地方は、農業を経済基盤として安定、少子高齢化、人口減といった多くの地方を悩ませる人口動態の課題も大きくはないとされるためだ。

上藤丸の建物の近接地にオープンした下「藤丸ショップ」の生活用品は十勝になかったものを中心に揃える

もちろんハードルはあるが、プロジェクトには地域だけではないメンバーが参画して進行している。そのうちの一つのスペースは、内装を中心ににぎわいのディスプレーを担う企業だが、そこにとどまらずブランディング支援として総合的に伴走してきた。

さらにCCCグループが加わることになった。藤丸パークに「ワンポイントカード」を導入するが、豊富なデータベースによるマーケティングで建て替えのプランニングをサポートすることにしている。

これらにより中心市街地を見舞う「負のスパイラルを正に変える」（村松社長）構えだ。

来街を夜から拡大

解体工事を終え、27年夏ごろに新たな藤丸の建設に着手する予定。それまでに資金面の裏付けを作るとともに、コンセプトの“上質でうれしい十勝に出逢える”を具体化する内容を固めることにしている。

高層化して複合施設とする構想はありつつも、建築費との見合いになることから建物の規模は現時点では未定だが、新たな藤丸としては食物販、ライフスタイル、コミュニティーの三つを打ち出すことにしている。

山川知恵取締役兼COO（最高執行責任者）は「物販と昼のにぎわいのよりどころにしたい」とする。帯広中心市街地は、かつては集積されていた物販の店が減り、昼間のにぎわいも後退しているが、夜間の飲食店は活況を呈している。01年に中心市街地活性化策の一環で設けられた「北の屋台村」が人を集め続け、車での行き来が難しい状況であっても夜は市内外から呼び込んでいる。新たな藤丸は物販やコミュニティーの機能で魅力を高めて来街を昼の広げることが再生のポイントだ。

観光客もターゲットの一つだが、地元客をメインと想定しており、旧藤丸の高齢化していた顧客層を30、40代ファミリー層に拡大することと併せて追求することになるが、「十勝にいると手に入らなかったいいもの」を持ち込むことで実現したいとする。

すでに藤丸パークの藤丸ショップの食物販の売り場では十勝産が6割を占めて地場産を打ち出しているが、生活用品では北欧食器や特徴的なキッチン用品、今治のタオルなど地域になかったものの提供に力を注いでいる。これらの動向も新たな藤丸作りに生かしていく。

インタビュー

スペースプロジェクトデザイン室 室長 シニアプランナー 田中三弘さん

一緒に考えて着地させる

同じ北海道、新札幌のSCを手掛けていた縁で藤丸の再生プロジェクトにかかわることになりました。

30年の建て替えに向けたスケジュールを固めるところから始めるのですが、みなさんのお話をいったん整理する必要がありました。プロジェクトには色々な人が集まっています。お話していることは同じようでしたが、実は少しずつ違っていたのです。

私自身もはじめは「お店をはやらせたい」ということを望んでいるのかと思っていましたが、よく聞いてみると「街に人を集めたい」ということがポイントでした。

そして整理した中身を『フジマルビジョンブック』という冊子にまとめました。プロジェクトで考えていることが世の中にきちんと伝わっていないと感じていましたし、使える資料が必要だと思ったからです。これを持って協賛金集めに走ることができました。

私たちはディスプレーの会社ですが、役に立つなら何でもやるトータルプロデュースで伴走しています。うまくいくには、デザイン発想ではなくて、一緒に夢を描いて、考えて着地させることが必要です。

今はうちのクライアントは大きな企業が多くなっていますが、商店街でお手伝いするところから始まった会社です。そこでは一緒に考えることが大事でしたが、私の中にもその発想があったのだと思います。